

神様

迷い猫の狐狸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自殺しても死に切れない人のお話

神
様

目
次

神様

何で僕なんかがこんな目に合わなければいけないの？何で僕だけが非難されなきゃいけないの？何で？何で僕だけなの？

母さん教えてよ。何で妹の肩なんか持つんだい？父さん教えてよ。何で弟ばかり見るんだい？僕のことを見ていないのかい？

ふと気付いたようにしか僕のこと見てないんじゃないかな？僕のこと見えていないんじゃないかな？僕のこと見えていないんじゃないかな？僕のことをもっとよく見てよ。僕のことを見てくれよ。何で見てくれないの？何でいつも僕だけが非難されなきゃいけないの？

酷いよ。酷すぎるよ。人間なんて嫌いだ。神様、どうか僕を殺してください。遠い遠い空の上に連れて行ってください。

僕の首をゆっくり締め、苦しみながら死なせてください。殺してください。

辛い。悲しい。笑顔を振りまいていても、心の中ではいつもそう思っているんです。だから昔から気持ち沈み易いです。すれすが溜まり易いです。

皆んなの前でも泣いていたい。苦しくて辛くて、ズキズキ痛む胸を引きずるのは僕には厳しいんです。

心が痛い。胸が痛い。皆の視線が辛くて、痛くて。僕の心はどうに折れてしまうようで。

嗚呼、こんなことすら文章にしなければ辛くて死んでしまいそうです。

先刻も泣きました。人の居ない隅で泣きました。声も上げられずに泣きました。

身体には幾つか線がつき、偶にそこから血が流れます。僕の身体も限界です。

助けてください神様。僕の心と魂を持って行ってください。それが出来ぬと言うのなら、僕の心だけでもいいので持って行ってください。

此の儘では苦しいです。苦しく生きていかねばなりません。

どうか神様、お願いです。こんな僕を殺してください。

願うことが無駄だと言うなら僕は自殺を図ろう。神様が僕を連れていかぬなら僕から行ってしまおう。

こんな世界とはオサラバして、人間の居ない世界へ行こう。僕だけの世界へ行こう。

眼下に見える地上を眺め、口元をニヤリと歪ませた。僕は人生をやめましょう。さようなら。もう会うことはないでしょう。

僕は屋上から飛び降りる。眼下に広がる車たち。早い早い車たち。スローモーションに流れていく映像ののち、僕の意識は暗澹の底へと落ちて行く。

どうか神様、、願いを叶えてくれるなら。僕を殺して下さい。僕を死なせて下さい。

嗚呼神様、僕はどうしようもなくなってしまった。結局は極楽地獄、どちらにも行けなくなってしまった。

今日も又繰り返し返そう。まだ死に切れないのだから。まだ連れて行ってはくれないのだから。